

# 津山の弥生土器 4

中山 俊紀

## はじめに

前回まで「津山の弥生土器」として壺、甕、高坏、器台それぞれの通年の変化をたどり、概要をみてきたが、その最終目的は弥生土器の変化に成立期の津山の特質をなんとかかがい知ることができないかということにあった。

家庭的な生産品である弥生土器は、それをとりまく社会的条件を反映しやすく、また考古遺物としてはあまねく発見されていて、地域間の比較が容易という特性をもっている。このため、地域社会の存在条件を比較する上で弥生土器は極めて有効な題材であろうと思う。

最終回にあたり壺、甕、高坏、器台と個別にたどってきた変化の特色を前提に、周辺地域との比較により、地域社会成立の起源及びその条件の変化を考えてみたい。

## 瀬戸内型甕とその分布

前期弥生土器のなかの地域性を示すものとして、東瀬戸内地方では深鉢形土器口縁部に断面が三角形をした凸帯を巡らす、いわゆる「瀬戸内型甕」(図1)がよく取り上げられる。秋山浩三は、この甕の分布について遺跡毎の出現頻度を広域に分析し、その中心が吉備地方にあること、出現頻度で区分すれば吉備を中心として同心円状の三分布圏として面的に広がることを示している(図2、註1)。

出現頻度は、播磨、備前、備中、備後、讃岐、伊予に濃密で、そのことから必ずしも吉備中心とはいひ難いが、分布圏の中央が吉備地方で、吉備と西伯耆、東出雲等との通交が開けていたことはこの図から推測してもよいだろう。もちろん津山の弥生前期遺跡では、京免遺跡でも高橋谷遺跡でも「瀬戸内型甕」の出現頻度は高く、久世町の五反遺跡でも似た状況である。

瀬戸内型甕発祥の地が吉備であるにしろないにしろ、前期後葉の時期には恐らく日常の親縁関係を主な契機として、地域的な土器様式が生み出されてきたのである。しかし、注意すべきは、分布圏として引かれる線は相対的なものであり、遺跡毎の出現頻度は一般に距離に比例しつつ漸移変化するが、排他を思わせる現象は認められることである。あくまで共通の土器伝統の基盤にたった土器様式のなかでの変化で、その境は不明確でもある。

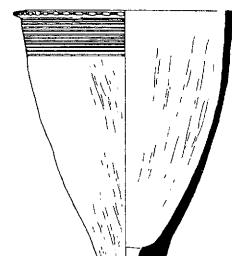


図1 瀬戸内型甕  
(京免遺跡出土)

## 瀬戸内型甕の分布と広口の壺

中期前葉の直口壺で口縁部に貼付凸帯を巡らすものから変化したと考えられる「広口の壺」の分布をおってみると、瀬戸内型甕の分布と基本的に類似していることに気づく(図3)。初期の典型例と考えられるものは備前、備中、備後、讃岐、伊予などに分布し、また美作や西伯耆、東出雲などでも発見されている。しかし、瀬戸内型甕の分布と大きく異なるのは、近畿圏の分布が薄いことである。近畿地方でも、同様の発達の経過をたどった紀伊型と呼ばれる装飾壺(図3-12, 13)があり、主として播磨、摂津、和泉、紀伊などの大阪湾岸の地域で発見されているが、それは瀬戸内地方のものと異なる変化をとげ、その後の出現頻度も大きくはない。

両者の対比で特徴的なことは、播磨地域が徐々に瀬戸内型甕の分布圏から離れ、近畿地方と土器様式上のつながりを深めていくことにある。

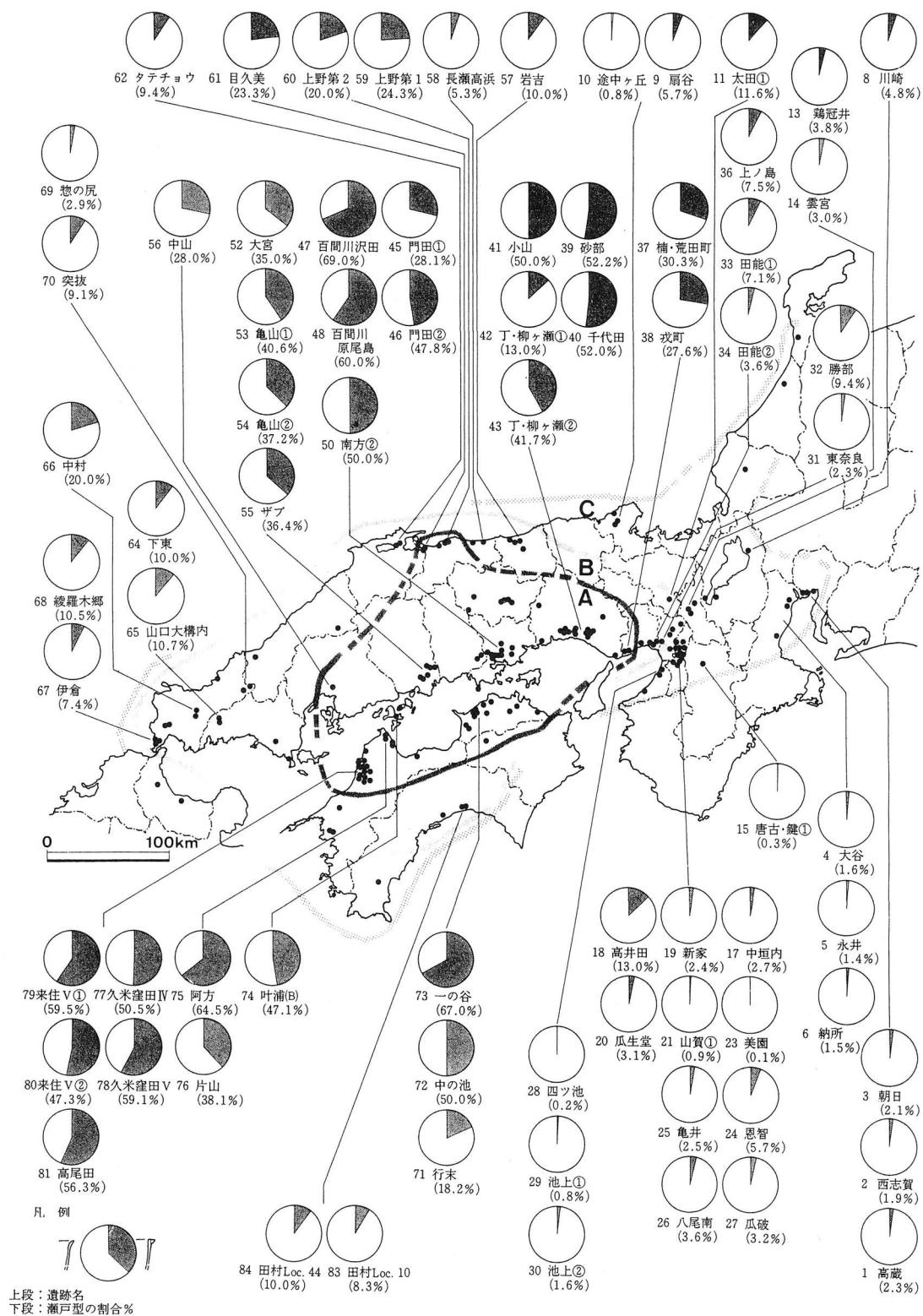


図2 濑戸内型甕分布図（秋山浩三 1992）

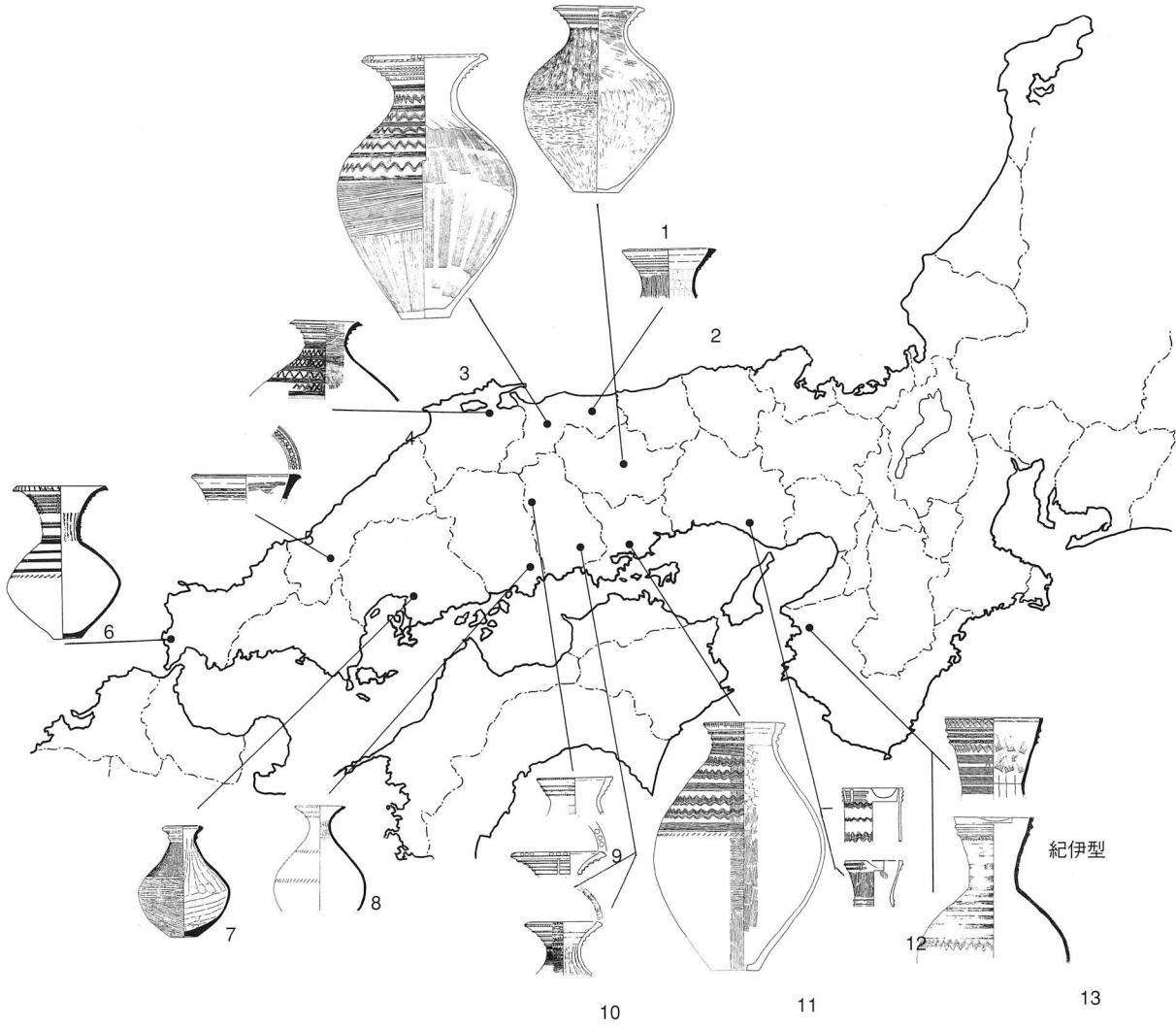


図3 広口の壺分布図

出土遺跡

- |          |          |          |        |          |
|----------|----------|----------|--------|----------|
| 1 沼E遺跡   | 2 後中尾遺跡  | 3 下山南通遺跡 | 4 布田遺跡 | 5 ヨレ遺跡   |
| 6 土井ヶ浜遺跡 | 7 大明地遺跡  | 8 ザブ遺跡   | 9 二野遺跡 | 10 蓮池尻遺跡 |
| 11 南方遺跡  | 12 大野中遺跡 | 13 岡村遺跡  |        |          |

長頸の壺C（広口壺）・いわゆる垂下形口縁壺の分布と津山

口縁部端が大きく垂下する形態の壺はもともと近畿地方で発達したもので、近畿地方一円に広く分布する（図4）。この垂下形口縁壺が美作で時折みられたことから、中期の美作の土器は瀬戸内経由で畿内の影響を受けているとされてきた。しかし、細かく特長を比較すると、それらは近畿地方でも西北部、丹波、但馬、丹後などのものに特徴が近い。また、美作のみならず従来資料が少なく存在の不明であった因幡や伯耆でも似た特徴をもつ壺が近年発見されてきて、おおまかにいえば、西方形の垂下形口縁壺の分布は第4図の網のようになる、といえる。資料豊富な西播磨に依然として少ないという特徴の変化はなく、備前にはほとんどないということは、少なくとも「瀬戸内経由の影響」という常識に疑問を抱かせる。

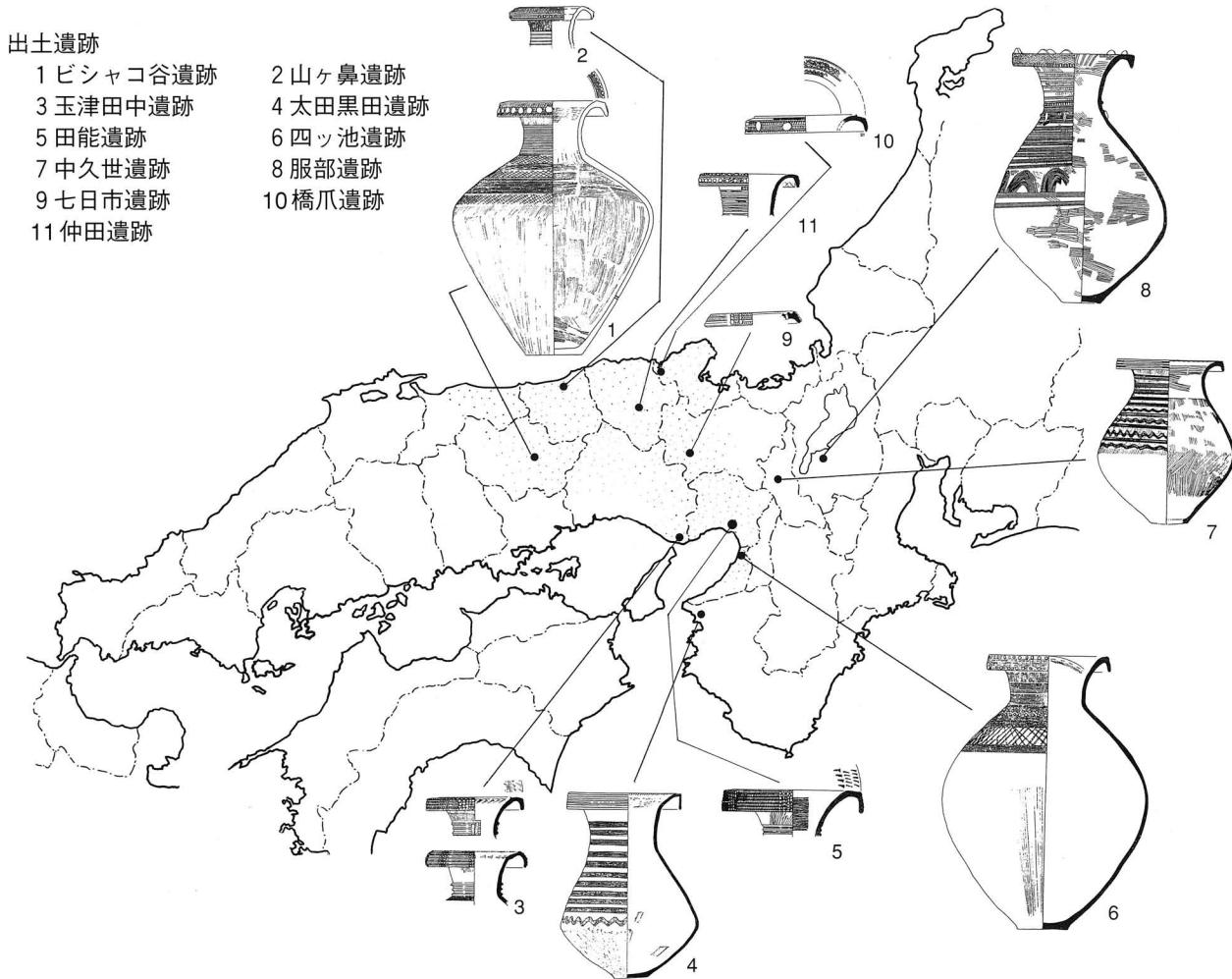


図4 長頸の壺C（垂下形口縁壺）分布図

#### 長頸の壺B（広口壺）···いわゆる「播磨型装飾壺」の分布と津山

長頸の壺Bは、普通「播磨型装飾壺」の影響を受けた壺と評価される。「播磨型装飾壺」は、加古川下流の溝之口遺跡などで多量に発見され「畿内地方と中部瀬戸内的性格の二面性を持ちつつ、播磨地方独自の形態、装飾を見る土器」と評価されている（註2）。しかし伯耆の下山南通遺跡では同時期とみられる類似した壺が発見され、近時の断片資料から推測して、美作や因幡でもほぼ時を同じくして同種の壺が存在していた可能性は強い。

もともとこの壺は、大きく外反する口縁部上面に貼付凸帯を巡らす広口壺の伝統に属するもので、広く西日本広域に共通の基盤をもつ（図5）。勿論指摘のとおり対応する壺は吉備にも畿内にも存在する。

先の指摘は重要ではあるが、代表的な「播磨型装飾壺」出土二地点の溝之口遺跡及び下山南通遺跡出土の壺（註3）を両にらみして断片的な資料から広く分布圏を推測すれば、南但馬（註4）や丹後（註5）、丹波（註6）、伯耆（註7）、出雲（註8）等にも同類の壺が存在する。加古川下流域で発見されているものが装飾要素で個性的であることは事実としても、同類の壺の分布という点でいえば、加古川下流域はその分布の東南端に位置することとなり、加古川下流域を必ずしも「播磨型装飾壺」の起源地と仮定する必要はない。

そうした目で長頸の壺B、Cの分布を重ねてみると、両者の分布が大きく重なり合うことが理解できる。そのことからいえば、もともと摂津、東播磨、丹波、但馬、丹後から北播磨、美作、因幡、伯耆、出雲等の地域は土器伝統を共有する部分が多くあったともいえ、その大枠のなかで美作の土器伝統は発達していくと捉えることができる。

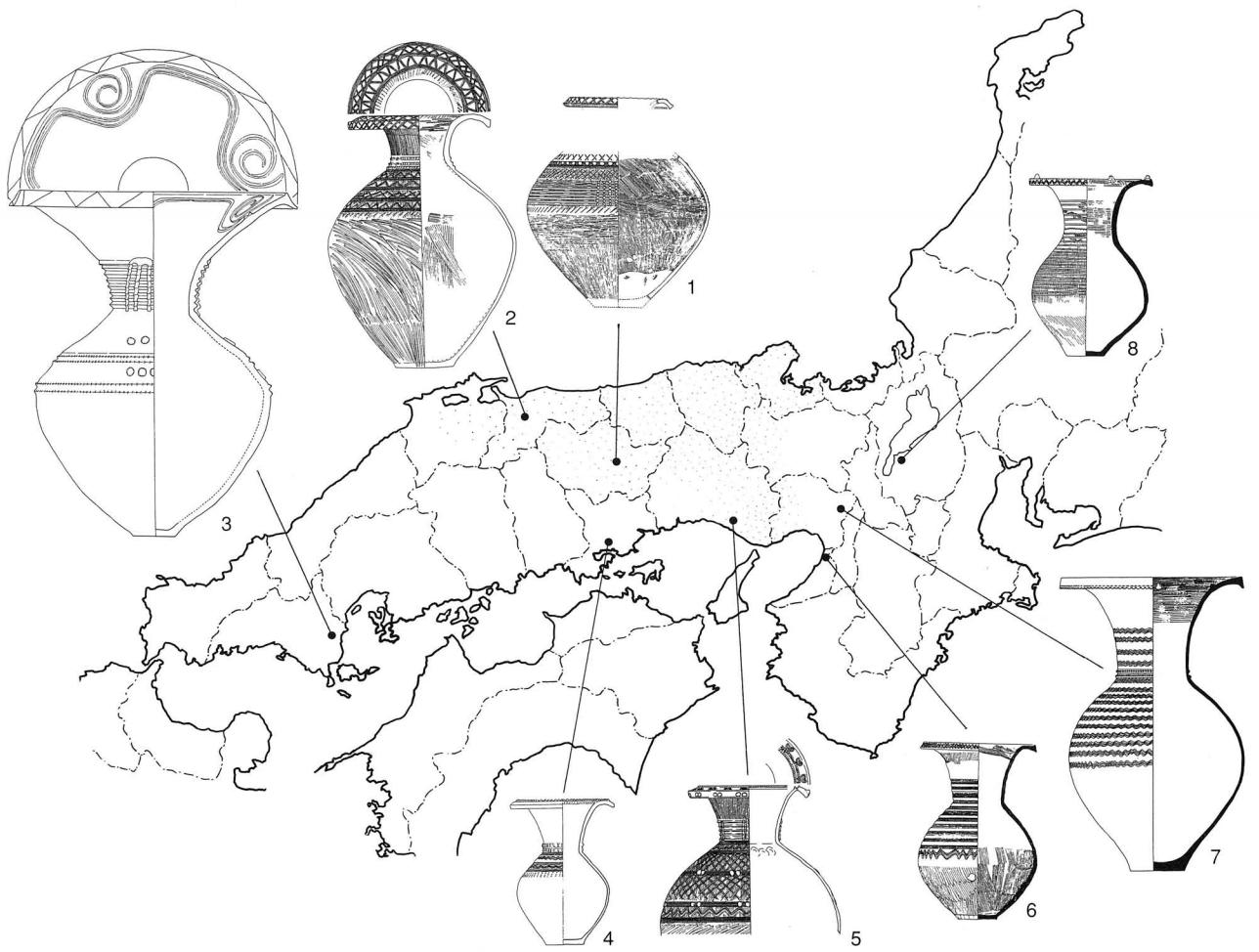


図5 長頸の壺B分布図

出土遺跡

- 1 崩塚遺跡
- 2 下山南通遺跡
- 3 柳井田遺跡
- 4 南方遺跡
- 5 溝之口遺跡
- 6 安満遺跡
- 7 服部遺跡

以上をまとめると、中期初頭は前期の土器伝統の中にあり、広口の壺はその流れの中に位置する。また、広口の壺が成立する頃、中期の美作の土器様式を規定する新しい土器伝統の複合基盤が成立する。この土器様式形成の契機は東西広範に及ぶ。中期の美作出土土器に東方的要素が強調されるが、東方要素は個別的影響を物語と捉えるのではなく、当初からの土器伝統成立の基盤のなかに一括含み込まれていた、と評価するほうが理解しやすいということになる。

垂下口縁形器台の分布とその成立

垂下形口縁壺（長頸の壺C）の口縁部と同様の特徴をもつ垂下形の大形器台(器台C)は、美作独自の発達をとげた土器とされる。なるほど今までには、ほとんどが美作でしか発見されず、備前（註9）の一例が知られていたのみであるが、近年因幡（註10）や東伯耆（註11）播磨（註12）でも少数発見されている。この器台も垂下口縁が顕著になるのは壺と同様中期後葉のことで、もともと垂下形口縁壺に触発され発達した可能性が強いので、さらに広範囲で見つかる可能性がある。

これと対応した器台分布を広くみると、畿内を中心に円孔透をもつ一群がみられ（註13）、備前、備中から西伯耆にかけ長方形の透孔をもつ一連の大型器台が分布し、当該地域の大型器台はそれぞれの特徴により大きく三分される。分布の点でも三者は原則として入り組むことはなく、ほとんどの地域はそのいずれかの伝統に属しているようである。なお、備前発見の垂下口縁形器台は美作からの搬入品という見方があるので、それは一応除外しておこう。

三者が入り組まないという前提で垂下口縁形器台の分布をみると、確実例は美作、因幡、東伯耆及び美作に接する部分の播磨に分布するということになる。ただし、但馬や北播磨では当該期の器台の資料が管見に入らず、それが垂下形口縁壺に触発され成立した器種であると仮定すれば、その先行形式を含め、今後それらの地域からも発見される可能性は高い。

とはいっても、分布範囲は西方形の垂下形口縁壺の分布範囲より限定されることはほぼ確実で、南播磨、摂津、丹波、丹後などはみな畿内的な器台の分布圏となっている。

#### 短頸の壺B（無頸壺）

垂下口縁形器台とともに美作独自の器形とされる独特の装飾壺で、美作以外では伯耆倉吉の後中尾遺跡（註14）で類例がある。畿内の同類の壺とのつながりも考えられ、東播磨に似たモチーフのものも存在するが（註15）、短頸の壺Bとそれらとには形態にかなりな隔たりがある。その状況から、垂下口縁形器台と類似した分布圏をもつ可能性がある。

#### 鍔形高杯の分布と津山

鍔形高杯は畿内に起源する器種で極めて広範な分布をもつ。畿内一円は勿論、西播磨、備前、美作、出雲などにも類例があり、印象的には東中国山地から山陰にかけ分布が濃いように見える。

この系統の高杯は、畿内では鍔端部が大きく垂下していくが、美作では器台と異なり端部が水平かわずかに垂下するものに限られる（註16）。丹波や東・西播磨、（但馬？）発見の同種の高杯は垂下傾向が強く、美作に至るいすれかの地域からその発達の道筋を異にするらしい。この範囲も前二者と概ね一致する可能性がある。

後三者の分布の特性を要約すると、垂下口縁形器台を生み出すもととなった美作でよくみかけられる垂下形口縁壺は丹波や但馬、丹後、因幡など広範な分布圏をもつが、丹波や丹後は畿内的器台の分布圏となっており、また鍔形高杯変化の道筋も異にする。したがって、垂下口縁形器台の分布範囲は、垂下形口縁壺の分布範囲より限定されている。その成立のメカニズムや分布範囲は、今の所周辺資料が少なくつかみがたい。美作以外では鳥取市の山ヶ鼻遺跡でB類型とC類型の器台、鳥取県西伯郡名和町の押平第1遺跡でC類型の器台、佐用郡上月町の坊主山遺跡でB類型の器台、岡山市の百間川遺跡ではC類型の器台が発見され、また、短頸の壺B類似資料が倉吉市の後中尾遺跡からも発見されているので、中期後葉にいたり東中国山地から山陰海岸にかけ、より地域色をもつ一群の土器が成立したとはいえる。

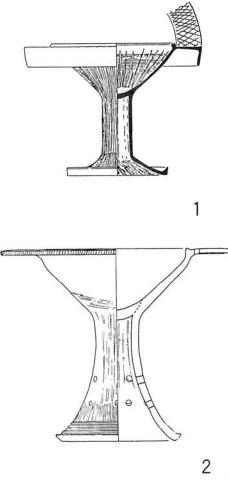


図6 鍔形高杯

1 瓜生堂遺跡

2 ビシャコ谷遺跡

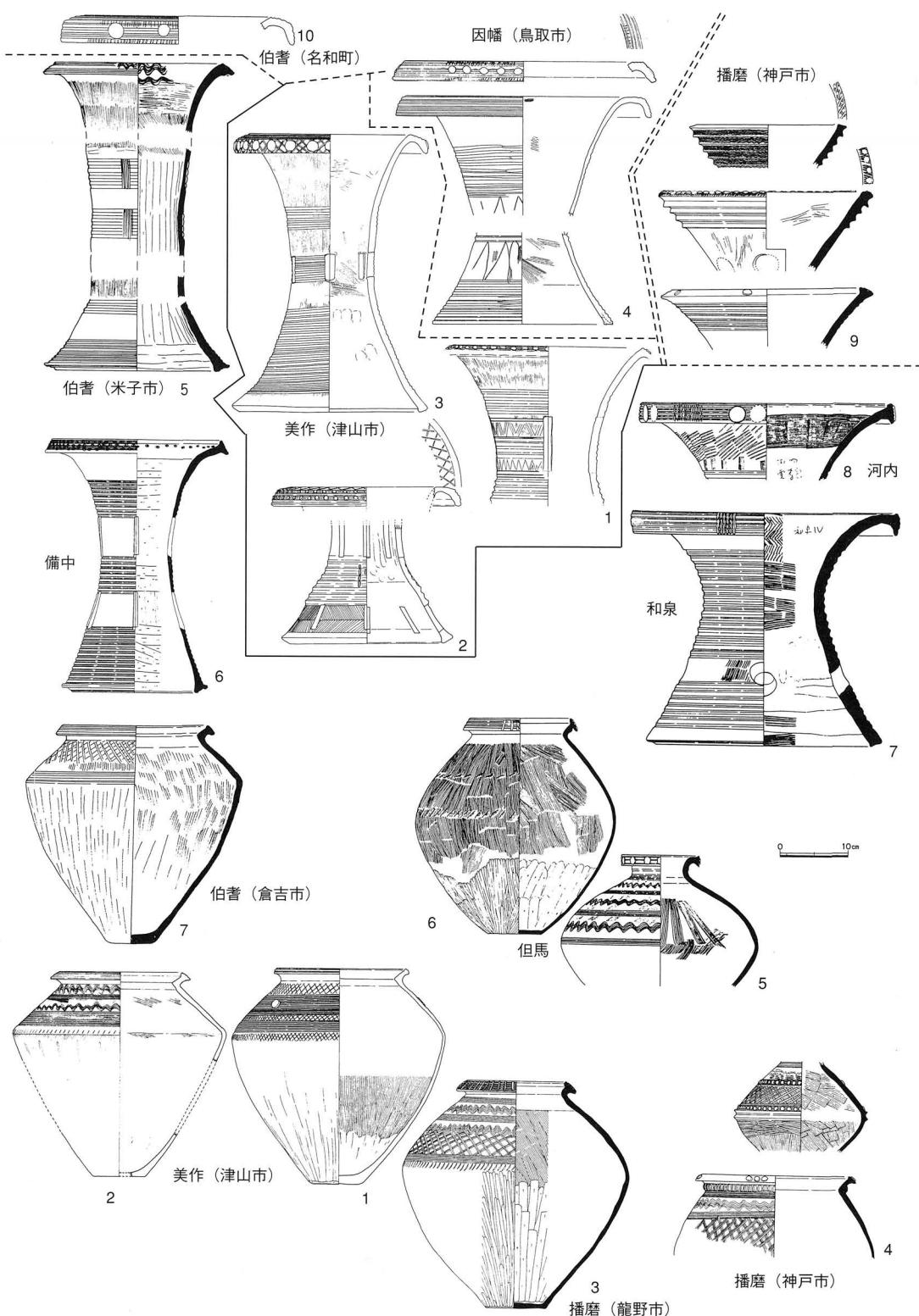


図7 各地の大型器台と短頸の壺B(縮尺1/10)

器台	1 紫保井遺跡	2 崩塚遺跡	3 紫保井遺跡	4 山ヶ鼻遺跡	5 青木遺跡
	6 鹿田遺跡	7 池上遺跡	8 東奈良遺跡	9 玉津田中遺跡	10 押平第1遺跡
壺	1 美作國府	2 ビシャコ谷遺跡	3 長尾・小畠遺跡群	4 玉津田中遺跡	
	5 ササ遺跡	6 米里遺跡	7 後中尾遺跡		

## 津山の後期弥生土器

中期と対比して後期の弥生土器を考えるために、対象範囲をほぼ津山に絞り込み、特徴的な以下の3類型の土器を取り上げ、個々の遺跡でのそれぞれの出土状況を検討してみたい。

### A類型の土器

島根県の九重遺跡出土土器を標識とする一群の土器（註17）で、類似土器は伯耆、因幡から北陸一円まで広範に分布する。しかし、美作では出土遺跡は限られ、古式の九重式類似土器は、津山では今のところ京免遺跡のみに限られる（註18）。壺・甕の二重口縁外面に櫛状工具により併行沈線文を施文することが特徴で、類似の土器は大田十二社遺跡（註19）、二宮遺跡（註20）、一貫東遺跡（註21）、鏡野町竹田遺跡（註22）などで発見されている。京免遺跡の他、隣接する大田十二社遺跡、二宮遺跡では比較的多く発見されているが、一貫東遺跡や竹田遺跡ではそれぞれ1点が発見されているのみで、まったく見つからない同時期の遺跡も多い。

久米町の領家遺跡（註23）では京免遺跡と同様古式の九重式類似土器が発見されており、同遺跡には多数の同種土器が存在する可能性がある。しかし、隣接する法事坊遺跡（註24）には同時期資料は多いにかかわらず、搬入品とみられる小型台付壺1点がみつかっている以外その種の土器はみあたらない。特定の遺跡で多量に製作され地域的にも拡散されていったが、地域全体の土器伝統をおしなべて変更するような直接的な影響は与えなかつたらしい。

### B類型の土器

畿内系ないしは播磨系といわれるあらいたたき成形痕跡を器表にとどめる土器で、これにも多くの類似土器が存在する。A類型のものと同様、遺跡毎に発見頻度に大きな片よりがある。天神原遺跡（註25）や綾部遺跡（註26）、大田十二社遺跡などで類似土器が多量に発見されている。しかし、天神原遺跡に近い一貫東遺跡などでは、同時期資料が少なからず発見されているにかかわらず、たたき痕跡を器表にとどめる土器は一点も発見されていない。

### C類型の土器

土師器に直接つながるシャープなつくりの薄手の土器で、因幡を中心に広く分布している。典型例は胴部器壁4mm前後で精巧なつくりのものが多く、家庭で製作されたものというより、専業集団により量産された可能性が強い。同じ時期には、岡山県南部でも特徴的な薄手の甕が流行し、同様の性格のものと推測されているが、不思議なことにその手の甕は津山ではほとんど発見されていない。典型的なC類土器を出土する遺跡の調査例は少ないが、当該期の遺跡では多かれ少なかれ同類土器が発見され、その亜形を多く出土する遺跡も多い。

以上3類型の土器を基本に、それらの現象からどのようなことがいえるのかを以下考えてみたい。

A、B類型の土器とC類型の土器では影響の受け方に基本的な違いがある。C類型の一群は土師器につながる系統の土器で、相当時期のどの遺跡にも強弱のちがいはあれ影響を与えている。これに対しA、B類型の土器の典型例が発見されるのは特定の遺跡に限られ、その影響が直接みられるのも特定の遺跡という傾向が強い。

津山の後期の遺跡から発見される土器は遺跡毎の変異幅が大きいが、この現象の背景にあるのはC類型の土器ではなく、時期的に古いA、B類型などの「外来系」土器と仮定できる。そのメカニズムは、以下の現象から説明できる。

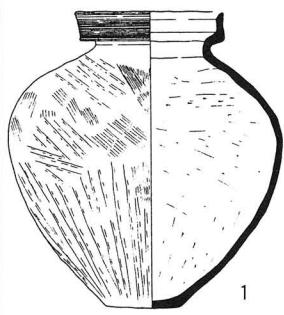
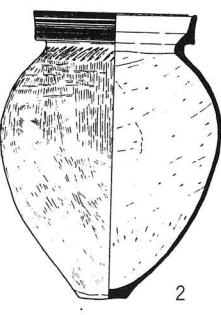
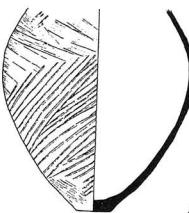
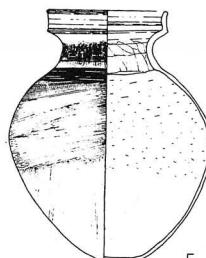
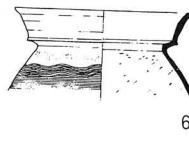
区分	典 型 例	特 徴
A	 	<p>島根県の九重式土器に類似する壺、甕など的一群。壺、甕、鼓形器台、台付壺などのうち二重口縁として立ち上がる口縁部外面に櫛状工具により併行沈線文の施文されているものをめやすとする。口縁部のつくりがシャープであり立ち上がらず施文も流麗な原型に近いものから、口縁部立ち上がりが外湾し、屈曲部も角がとれ、施文が雑となる大幅に変容したものまでの幅がある。出土時間幅は、大田2期から3期にわたる。</p>
B	 	<p>たたき成形痕を器表に残す壺、甕類全般を対象とする。そのほとんどは甕で在来の土器の特徴と入り混じった多くの変換形ないしは変容タイプが存在する。</p>
C	 	<p>洗練されたシャープな作りの薄甕類を代表とし、口縁部内外面は横な仕上げ。肩部に櫛状工具による波状文を施文するものが多い。また、同様工具で胴部上半を横方向に刷毛目仕上げを行うものが多い。岡山県南部の酒津式併行期以降にみられる薄甕に対応するものと見られ、因幡方面からの影響を強くもっているとみられる。</p>

表1 後期の「外来系」土器

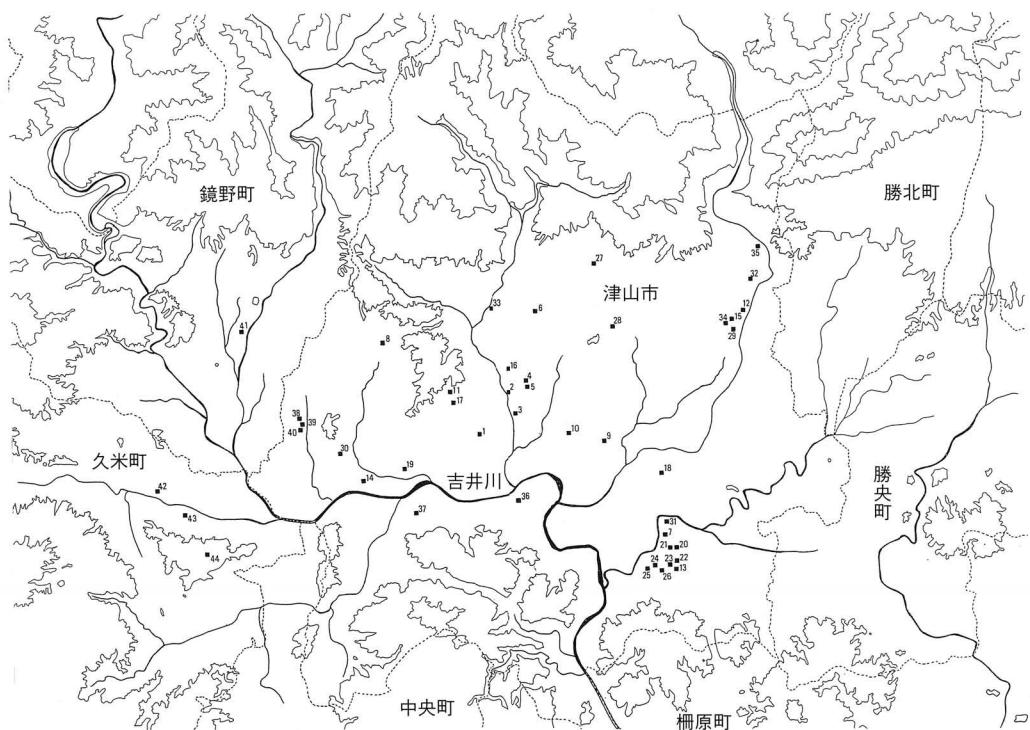


図8 後期遺跡分布図

旧郷名	遺 跡 名	時期 地図番号	1	2	3	4	5	備 考
苦田	沼E	5	○	×	×	×	×	
	大田十二社	16	○	A	A	B・C	B・C	A,B,Cとも数量多い。
	京免	2	○	A	○	C	C	A,Cとも数量多い。
	竹ノ下	3	○	○	○	○	×	
	内山	17	○	○	×	×	×	
	二宮	14	○	A	○	C	C	A,Cとも数量多い。
	有本	38	○	○	○	○	×	
	竹田	4	○	○	A	×	×	変容形1点のみ発見。
	有元	39	○	○	×	×	×	
	荒神峯	40	○	○	○	○	×	
久米	桃山	36	×	×	×	○	×	
	津山口	37	×	○	×	×	×	
	落山	44	×	○	×	×	×	
	領家	42	○	A	○	×	×	Aはかなり存在するらしい。
	法事坊	43	○	A	○	○	○	搬入の可能性がある台付壺1点のみ発見されている。
勝田	天神原	18	○	○	○	B	×	Bの数量多い。
	東藏坊	34	×	○	○	×	×	
	綾部	35	×	×	×	B	×	Bの数量多い。
	一貫東	20	○	○	A	○	×	変容形の甕1点のみ発見されている。
	大畠	24	○	○	×	×	×	
	小原	25	○	○	×	×	×	
	西吉田	7	○	○	×	×	×	

表2 各類型土器の有無

\*時期は大田十二社遺跡後期5区分をめやすとする。おおむね、1, 2期は後期前葉、3は後期中葉、4, 5期は後期後葉。

1 異なる系譜土器の間に、単純な要素の変換がみられること。

2 異なる系譜土器の間に融合的な土器が生み出されていること。

1は、京免遺跡や穴田遺跡などで確実例が把握され、1を介在させれば2は津山のたいていの遺跡出土土器でその存在が把握できる。

したがって、「外来系」土器が基本となって津山の土器は大きく変容を受け、土器の多様性がうみだされたと考えてよい。

典型例としてA、B 2類の土器をとりあげたが、津山からみて「外来系」土器はこの他にも多く、加えてそれらの相互作用が複雑にからまる例も少なくない。また、当然ながら2については共時的変化の他、通時的なものをも含んでおり、それらの結果、「外来系」土器の影響の強弱によって遺跡毎に別ものともみえる津山の後期土器の複雑な様相が生じることになったといえる。

かつて後期の土器の多様なあり方を複数の「外来系」土器伝統に起因するとみ、中期土器伝統の静的なありかたと比較して多系的、逆に中期の土器伝統を単系的と評価したことがある。そこに中・後期の土器伝統のあり方の基本的な違いをみたい。

### まとめ……土器からみた津山の中・後期の弥生社会

非常に斉一性の高い土器様式として、弥生前期土器は短時間のうちに西日本一帯に広まったとされている。それでも前期後半には徐々に地域色をもった土器も作られるようになり、その一例として瀬戸内型甕が取り上げられる。その分布は秋山により示されている先の分布図のように、中部瀬戸内を中心には伯耆や出雲などへも分布しており、出現頻度に階層差があって、遠隔地ほど段階的に出現頻度を減じていくという規則性があるようにみえる。

弥生中期に至り、近畿地方と中部瀬戸内地方の土器の地域差がより鮮明となり、その間で播磨地方は東西の変異を含みつつも、近畿地方の土器という様相を強めていく。その中で、「近畿地方と中部瀬戸内的性格の二面性をもちつつ、播磨地方独自の形態、装飾を見る土器」として「播磨型装飾壺」が登場するが、同類土器の分布は当初から美作や伯耆、因幡、但馬、丹後などを広く含むものであつたらしく、「播磨型装飾壺」の広域分布圏が想定される。

「播磨型装飾壺」に遅れて発達する垂下形口縁壺はもともと近畿地方で発達する壺の一種であるが、近畿西辺部、摂津～丹後に至るルート近辺にそのうち独特の器形をもつ垂下形口縁壺があつて、それは因幡や美作にも分布し、「播磨型装飾壺」の分布と大きくオーバーラップするらしい。

両者の重なる範囲は、もともと土器伝統共有圏としての性格を強くもち、その中で個々の土器形式が展開していくと捉えると理解しやすい（註27）。

中期後葉に至り垂下口縁形器台が発達するが、その分布範囲はどうみてもその重なり合う地域より狭く、その範囲のつながりの強さを想定させる他の現象もある。何らかの生態的な共通性が垂下口縁形器台を生みだす背景にあったことも想定されるが、結果として先の土器伝統共有圏の中にさらに小さな分節範囲を生み出していると考えざるをえない。

後期になると出雲、吉備などといった地域で中心をもった地域個性の強い土器様式が発達しだすが、津山の弥生土器にはそれらの影響が偏在して現れ、それぞれのその度合いによって遺跡毎の土器の様相に大きな変化を生じる結果となっている。間接的な個性の主張とはいえ、津山という小さな範囲の遺跡毎に多系的な土器の個性が主張されるという結果となっており、そういった状況から中期の土器伝統の

ありかたを眺め返すと、連綿とした広がりをもつ中期の土器伝統のもの静かな静的性格が浮かびあがってくる。敷衍すれば、美作の中期社会が地域個性を外に主張する必要も、また基盤にも乏しかったともいえる。恐らくは、基本的な社会関係は村内あるいは地域内関係にあって、広域の社会ないしは経済関係が社会の根底を規定することとはまだなっていなかったと想定される。

津山の弥生中期人にしてみれば、われらが土器は皆共通であり、同一イメージの土器を作り続けることもまた自明のことであった。したがって、どの集落でも共通の土器伝統の中から生み出される「われらが土器」を永年月にわたり繰り返し繰り返し作りつづけていったのであろう。

美作全体をながめても状況は変わらず、さらはずっと先もその先にも同じ土器を作りつづける集団がいた。意識するにしろしないにしろ、そこにつらなる人々の間には粗密の差はあれ共通の帰属認識が存在していたことは想像に難くない（註28）。

しかし、後期の「地域性を主張する土器」の流入は、こういった社会関係が根底から覆されたことを暗示している。土器の上からはそのメカニズムは説明しがたいが、ここ津山でも弥生後期に至り大きく社会の再編が加速したことは推測できる。



図10 国道429号線ルート図

## 余 談

津山から田熊をとおり植月を通過し真加部に抜け、大原から東粟倉に至る道が国道であることを意識する人は少ない。ふとしたことから、この行き先を調べて驚いた。兵庫県の千種町をとおり波賀を抜け朝来から福知山までほぼ直線でつづいていたのである。逆に目をやると加茂川町を抜け、足守から古代吉備中枢部に接続していた。不見識といわれそうであるが、まさに美作と但馬、丹後及び丹波、摂津などを結ぶ原始の幹線としてまことにふさわしいルートではないか。縁あってこの道を朝来まで通ったが、二ヶ所の難所を除き険しい起伏もなく集落は途切れることの少ない、いにしえの道として実にふさわしい風情があった。

さて、何に驚いたのだろうか。

大田十二社遺跡の調査後その報告書の作成で兵庫県教育委員会にお邪魔し、先年亡くなられた松下勝さんに日高町楠宜々森遺跡（但馬国分寺跡隣接地）の弥生後期の出土資料をみせていただいた。そこで大田十二社遺跡出土の器台によく似た小型器台（時期差はあるが）を発見した。さらに小型の鉢形土器は、津山で発見されるものとあまりにもよく似ていて、同行していた行田君と津山で出土してもまったく違和感がないなど話したほどだった。松下さんによると、その小型鉢は楠宜々森遺跡では毛色の違うものとのことでもあった。以後、彼の行き来のルートに対する疑問が永らく頭の隅にあったことが一つ。もう一つは次のような疑問があつたことによる。

弥生時代中期の美作の土器は畿内系土器の強い影響を受けているといわれてきた。その影響のルートとしていわれるのが、瀬戸内海経由で西播磨、あるいは備前経由で入ってきているというものであった。しかし、調査にたずさわった遺跡で発見される土器の特徴は、必ずしもそういったルートを想定してしつくりといかないものの方が多いかった。

その二つの疑問の鍵となりそうに思えたからだった。

このたび、本稿を書くにあたり最近発見された資料に極力目をとおすことに努めたが、その目で調べると問題地域の土器資料が皆無に近い状況であることをあらためて認識した。それでも約20年前に比べると瀬戸内側の資料は飛躍的に増大し、日本海側の資料も僅かながら新しく発見されていた。そういうわけで今回もまた見通しを語る以上には進められなかったが、以前よりも少しは現実に近づきつつあるように感じられる。

## 謝 辞

折にふれ兵庫県の弥生土器資料を送付いただいた故松下勝さん、友久伸子さん、同じく鳥取県の資料をいただいた水島稔夫さん、また本校の執筆にあたり突然の訪問にもかかわらず親切に出土土器を実見させてくださった兵庫県八鹿町教育委員会の谷本進さん、同朝来郡広域行政事務組合の田畠基さん、中島雄二さん、他多数の人々からご教示ご協力をいただきました。たいへん有り難うございました。

なお、本校は弥生土器の実証的な方法からみれば、たいへん乱暴で粗雑な内容を多く含みます。今後とも、ご叱正、ご教示をいただければ幸甚です。

註

\*本文中で旧国名を用いてきたがそれは単に便宜的なもので、現県名で記述するより説明に便利なためという理由による。  
したがって、必要に応じて播磨東部とか北部とか適宜用いているが、厳密な範囲を指し示しているわけではない。

- 1 秋山浩三「弥生前期土器—遠賀川式土器の地域色と吉備—」吉備の考古学的研究（上）山陽新聞社 1992
- 2 松下勝「播磨をめぐる弥生文化」松下勝著作集刊行会 1993  
友久伸子「弥生時代の播磨型装飾壺—その文様にみる地域色」今里幾次先生古稀記念『播磨考古学論叢』  
同刊行会 1990
- 3 「下山南通遺跡」鳥取県教育文化財団報告書21 (財) 鳥取県教育文化財団 1986
- 4 赤尾遺跡出土壺など。谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社 1992
- 5 橋爪遺跡などに類似資料が見られる。「橋爪遺跡」第5次発掘調査概報 京都府遺跡調査概報第87冊 京都府教育委員会 1999
- 6 「七日市遺跡（I）」第2分冊 兵庫県文化財調査報告書第72-2冊 兵庫県教育委員会 1990
- 7 森下哲也『後中尾遺跡』日本土器辞典 雄山閣 1996
- 8 「天神遺跡第9次発掘調査報告書」出雲市教育委員会 1999
- 9 正岡睦夫「備前地域」弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社 1992
- 10 「山ヶ鼻遺跡」I・II (財) 鳥取市教育福祉振興会 1995, 1996
- 11 「名和町内遺跡分布調査報告書」名和町文化財報告書第21集 名和町教育委員会 1998  
(現物を確認しておらず、壺口縁の可能性もあるが、図上判断は当所職員の一一致した見解である。)
- 12 「本郷・大垣内・坊主山遺跡」中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（佐用編）兵庫県教育委員会 1976
- 13 龍野市尾崎遺跡、神戸市玉津田中遺跡、春日町七日市遺跡、三田市天神遺跡、同奈カリ遺跡、高槻市東奈良遺跡  
などに例がある。
- 14 森下哲也『後中尾遺跡』日本土器辞典 雄山閣 1996
- 15 「玉津田中遺跡」第5分冊 兵庫県文化財調査報告第135-5冊 兵庫県教育委員会 1996
- 16 津山市西吉田遺跡、久米町稼山遺跡群、作東町高本遺跡出土例など
- 17 打田才、東森市良、近藤正「島根県安木平野における土壙墓」『上代文化』36 1965
- 18 「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会 1882
- 19 「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 津山市教育委員会 1981
- 20 「二宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告26 岡山県教育委員会 1978
- 21 「一貫東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集 津山市教育委員会 1992
- 22 鏡野町教育委員会のご好意で実見
- 23 「領家遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8 岡山県教育委員会 1975
- 24 「法事坊遺跡」「稼山遺跡群」久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979
- 25 天神原遺跡 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7 岡山県教育委員会 1975
- 26 綾部遺跡 採集資料 文化財センター所蔵品 未整理
- 27 弥生前期土器は西日本全体が一樣で、おおきくいえば広く面としての共通性を示す。地域色をもつ瀬戸内型甕の分布にしても面として分布していることは明かで漸移的分布を示す。中期の「播磨型」壺にしても、中期後葉の垂下形口縁壺の分布にしてもいずれも面として広がっているという分布のありかたに基本的に変わりはない。もちろん一つの土器自体には、素材の選択や形態、製作手法、文様、機能などさまざまな属性が統合されており、同類土器という認識は主観的印象による部分が多い。特定の属性に絞れば、主観的に同類とされる土器相互に根本的な相違点があるのかも知れないが、ここではあくまで一般的な印象を根拠に概要の把握につとめてきた。漸

移的な変化という点でいえば、例えば壺Bにしても、器種としては西日本広域にわたり広がっているが、分布を追っていくと連続的変異帶の中で変異界の存在が推測され、その推定された変異界は土器伝統の重層的な階層レベルの存在を前提にしてみても、単純な空間分布と大きくずれるという結果となった。

28 「播磨型装飾壺」、垂下形口縁壺、垂下口縁形器台の三者の関係をいうと、広がりとしては「播磨型」装飾壺>垂下形口縁壺>垂下口縁形器台という関係がなりたつ。土器のありようが何らの集団帰属意識を反映しているとすると、帰属意識は、垂下口縁形器台>垂下形口縁壺>「播磨型」装飾壺の範囲という関係もなりたつ。もともと、弥生前・中期の土器が「連続的変異帶」を形成するという前提にたてば、土器の特色が近い集団間の日常的な接触は、直接であれ間接であれ頻繁であったと仮定できる。そういう関係が仮定できれば、津山の人々の集団帰属意識の変遷もどのルートに沿ったものであったかがおのずと知れよう。なお長頸の壺Aのことについてふれずに話を進めたが、この点について補足しておきたい。初回に中期の基本となる長頸の壺三種は、同一の土器伝統の中の機能による変異にすぎないと説明した。そのうち長頸の壺Aはもっとも広域に分布し「連続的変異帶」を形成する壺で、基本的な器種である。長頸の壺B、Cの分布は先にふれが、A、B、C三者の関係は、A>B>Cである。その三種が一体として美作の中期後半の壺の伝統として組入れられていることは、あたかも帰属意識の変遷を再現するかのようである。

#### 弥生土器実測図出典

図1 濑戸内型甕

「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会 1982

図2 濑戸内型甕分布図

秋山浩三『弥生前期土器—遠賀川式土器の地域色と吉備—』「吉備の考古学的研究」(上) 山陽新聞社 1992

図3 広口の壺分布図

- 1 「沼E遺跡Ⅱ」 津山市埋蔵文化財発掘調査報告8 津山市教育委員会 1981
- 2 「後中尾式土器」 森下哲也 日本土器辞典 雄山閣 1996
- 3 「下山南通遺跡」 鳥取県教育文化財団報告書21(財) 鳥取県教育文化財団 1986
- 4 「布田遺跡」 国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I 島根県教育委員会 1983
- 5 (ヨレ遺跡) 松本岩雄「石見地域」弥生土器の様式と編年山陽・山陰編 木耳社 1992
- 6 (土井々浜遺跡) 山本一朗『防長の弥生土器』「山口県の弥生土器—集成と編年」周陽考古学研究所 1979
- 7 (大明地遺跡S B 9) 「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告IV」(財) 広島県埋蔵文化財センター 1987
- 8 (ザブ遺跡) 山陽新幹線建設予定地内遺跡発掘調査報告 広島県教育委員会 1973
- 9 (二野遺跡4 C区谷包含層) 「二野遺跡」 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15 岡山県教育委員会 1977
- 10 「蓮池尻遺跡」 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告62 岡山県教育委員会 1986
- 11 「南方遺跡発掘調査概報」 岡山市教育委員会 1971
- 12 「溝之口遺跡」(加古川市中西低地遺跡採集の土器) 松下勝著作集「播磨をめぐる弥生文化」松下勝著作集刊行会 1993
- 13 (大野中遺跡) 土井孝之「紀伊地域」弥生土器の様式と編年 近畿編I 木耳社 1989
- 13 (岡村遺跡) 土井孝之「紀伊地域」弥生土器の様式と編年 近畿編I 木耳社 1989

図4 長頸の壺Cの分布図

- 1 「ビシャコ谷遺跡」 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会 1984
- 2 「山ヶ鼻遺跡」 I・II (財) 鳥取市教育福祉振興会 1995、1996
- 3 「玉津田中遺跡」 第5分冊 兵庫県文化財調査報告第135-5冊 兵庫県教育委員会 1996
- 4 (太田黒田遺跡) 井戸11 土井孝之「紀伊地域」弥生土器の様式と編年 近畿編I 木耳社 1989
- 5 (田能遺跡) 4調査区土壤6896 森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 6 (四ッ池遺跡) EW54 北区土壤 樋口吉文 「和泉地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 7 (中久世遺跡) 森岡秀人「山城地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 8 (服部遺跡) SX(M) 273 森岡秀人「山城地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 9 「七日市遺跡(I)」第2分冊 兵庫県文化財調査報告書第72-2冊 兵庫県教育委員会 1990
- 10 「橋爪遺跡第5次発掘調査概報」京都府遺跡調査概報 京都府教育委員会 1999
- 11 (仲田遺跡) 谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社 1992

図5長頸の壺Bの分布図

- 1 「崩塚遺跡」 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集 津山市教育委員会 1989
- 2 「下山南通遺跡」 鳥取県教育文化財団報告書21 (財) 鳥取県教育文化財団 1986
- 3 (柳井田遺跡) 山本一朗『防長の弥生土器』「山口県の弥生土器一集成と編年」周陽考古学研究所 1979
- 4 「南方遺跡発掘調査概報」 岡山市教育委員会 1971
- 5 『溝之口遺跡』(加古川市中西低地遺跡採集の土器) 松下勝著作集「播磨をめぐる弥生文化」  
松下勝著作集刊行会 1993
- 6 (安満遺跡) 東部方形周溝墓群V区II C期 森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 6 (四ッ池遺跡) 81北区SD006溝 樋口吉文 「和泉地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 7 (勝部遺跡) SX(M) 143 森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 8 (服部遺跡) 森岡秀人「山城地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990

図6 鎧形高环

- 1 (瓜生堂遺跡) 上層遺構 寺沢薰・森井貞雄「河内地域」弥生土器の様式と編年 近畿編I 木耳社 1989
- 2 「ビシャコ谷遺跡」 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会 1984

図7 (上) 大形器台

- 1 (紫保井遺跡) 中山俊紀『津山市紫保井遺跡と中期小住居群』古代吉備第15集 古代吉備研究会 1993
- 2 「崩塚遺跡」 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集 津山市教育委員会 1989
- 3 (紫保井遺跡) 中山俊紀『津山市紫保井遺跡と中期小住居群』古代吉備第15集 古代吉備研究会 1993
- 4 「山ヶ鼻遺跡」 I・II (財) 鳥取市教育福祉振興会 1995、1996
- 5 (青木遺跡) 清水真一「因幡、伯耆地域」弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社 1992
- 6 (鹿田遺跡) 土坑117 正岡陸夫「備前地域」弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社 1992
- 7 (国府遺跡) 土坑3 寺沢薰・森井貞雄「河内地域」弥生土器の様式と編年 近畿編I 木耳社 1989
- 8 (池上遺跡) 樋口吉文 「和泉地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 9 (東奈良遺跡) 森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編II 木耳社 1990
- 10 (玉津田中遺跡) 第5分冊 兵庫県文化財調査報告第135-5冊 兵庫県教育委員会 1996
- 11 (押平第1遺跡) 「名和町内遺跡分布調査報告書」名和町文化財報告書第21集 名和町教育委員会 1998

図7（下）短頸の壺B

- 1 （美作国府跡）安川豊史「美作国府跡出土の弥生土器」古代吉備第17集 古代吉備研究会 1995
- 2 「ビシャコ谷遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会 1984
- 3 「長尾、小畠遺跡群」龍野市文化財調査報告21 龍野市教育委員会 1999
- 4 「玉津田中遺跡」第5分冊 兵庫県文化財調査報告第135—5冊 兵庫県教育委員会 1996
- 5 （ササ遺跡）谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社 1992
- 6 （米里遺跡）谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社 1992
- 7 『後中尾式土器』森下哲也 日本器辞典 雄山閣 1996